
わたしのあしあと

月影れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしのあしあと

【Nコード】

N3241C

【作者名】

月影れん

【あらすじ】

この物語は私『月影れん』が主人公の、フィクション、ノンフィクションを組み合わせた物語。いじめ、本当の友情などがあるひとりの少女が（笑）真正面から見つめていきます。

第一話：記憶をタドル。（前書き）

フィクション＋ノンフィクション物語です。

第一話：記憶をタドル。

私の名前は月影^{つきかげ}れん。

現在、高校1年生。咲流星^{さくらひゅうせい}高校に通っています。

この高校はこの辺で一番レベルの低い公立高校^{みどりやうりゅうこう}。

自己採点の結果が良くて、第一志望の緑谷^{みどりや}高校でも、受かったって
た力モ……。

とか、ちよつと後悔しつつ、通っています。

まあ、安全だからって高校のレベルを下げて受験したんだけどね（
^ー^；）

緑谷高校には仲のよかった友達がいっぱい行っちゃったんだよね。
でも、今は咲流星高校にも仲のいい友達が出来てわりとたのしくや
ってます。

今高校ではみんな大人になって、いじめなんてないんだけど、ニユ
ースとかでいじめの問題を取り上げられることがよくある。
自殺をする人もたくさんいる…。

そんなガキみたいなことなくていいじゃん。

「つ……つきかげれんです……。よろしく」

なんとなく記憶を辿ってみた。

浮んだのは小学一年生だった私が入学式の初日に皆の前で自己紹介
をしている場面だった。

私はほかの子よりもひどく緊張している。しかも声も小さい……。

我ながら、過去の自分のあどけなさ、純粹さに笑ってしまった。

このころ、色々あったなあと、色々思いを馳せてみる。

誰かを傷つけたり、誰かが他の誰かを傷つけていたり、傷つけられたり……。

誰かの優しさを知った気がする。

誰かの涙もみた気がする。

誰かの苦しみも知った気がする。

人の裏側も知った気がする。

懐かしい。あの時の記憶。あの時の……今までの思い出全部。

蘇れあの日々よ……。

蘇れ。

そう

この物語は、フィクションとノンフィクションを組み合わせ
たわたしの周りで起きた出来事。

この小説には少しノンフィクションも含まれています。作中に
でてくる私の友人のモデルになってくれる人には承諾はとっており
ます。

第一話：記憶をタドル。（後書き）

こんにちは、月影れんです。

えー、私は今まで、コナンのファンフィクションしか書かなかつたのですが、この小説を書き始めることにしました。

最近酷いいじめなどが多いじゃないですか。それで、それを題材にした小説を書こうと思ったんです。それであえて私を主人にして、少しノンフィクションも入れてみたんです。

まだまだ未熟者ですが、よろしくお願いします。

第二話・記憶へモデル。(前書き)

もはやSFですね……汗

第二話：記憶へモデル。

「オギヤー、オギヤー！！！！！」

私は、12月14日の昼の12時頃…鳥取県のある市まちで生まれた。
2,520gという少し小さい赤ん坊だった。

私はタイムスリップをする。もちろん、頭の中で。

私はそつと目を閉じた。……私の足跡を私の足で辿るために……。

いざっ！タイムスリップ！！！！！！

ゴオオオオオオオオオッ

……えっ！？なに！？コレっ！？

私はなぜか眩しい光に包まれた。何かに吸い込まれていくような錯覚を覚えた。

ものすごく強い引力に吸い込まれていく。

「うわああああああっ！！！！！！」

錯覚などではなかった。私は、まるでブラックホールのようなへんてこな物体にまっさかさまに吸い込まれていった。

「う……。痛あ。あれ？こ、ここは……？」

私の目に映ったのは、一言で言うと、不思議な光景セカイだった。

なにかがおかしい……。

ん！？んんんんんん！？

えええええ！？（おちつけ）私、雲の上に乗ってるぅー！！！！？

「??しかもピンク……（^ー^;）」

雲って水蒸気（?）だね？　これ、まるでわたあめみたいなんだけど！？」

頭を強く打ちすぎたのか！？　死んでしまつてここは天国なのか！？

私はいろいろ思考をめぐらせてました……（笑）

「おう、やつとおきたか……」

なんか今、生意気な男の子の声が……。気のせいかな？　まあ、一応。

「え……？　だれ？　何処？」

「バー口。ここだ……！！　俺が見えねえのか！？」

見えないつて……（-_-;）何処だよおつ。

私は辺りを見回した。やつぱり誰もいない……。

「見えないんだけど……？」

「はあ！？　おまえの下にいるだろ……！！　お・ま・え・の・し・た・に……！！」

私は、思いもよらない答えに一瞬ボカンとなった。

はあ！？　私の下あつ！？」

私は、恐る恐るアヒル座りになつた自分の足元を見てみた。

「！？」

そこには、妖精か天使か悪魔ともつかないへんてこな生物がいた。手のひらサイズくらい……？

「そんなに驚くなよな。」

そのへんてこな生物は喋った。

「……！？」

もうなにがなんだか分かんないよおつ……。

「おゝい？　もしも……（呆）」

「ハハ……。君は……？」

「俺の名前はモルフ。俺は、おまえの……」

ゴクリ

「妖天魔^{ようてんま}。守り神^よつてわけ。あ、妖精の妖、天使の天、悪魔の魔つて書くんだ」

「なにそれ……」

意味わかんない……。妖天魔つて！？やっぱり私死んじやったの！？

私の（混乱）状態を無視して、その、妖天魔……は話しを続ける。

「まあ……いきなり言われてもわかんねえよな。妖天魔っつーのは、人間誰にでもついている守り神。普段は目には見えない」

「え……？じゃあ、なんでウチには見えるの？」

「お前の心が俺を呼んでいたからだ。だから、俺はおまえをタイムスリップさせるために姿を現したんだ」

「タ、タ、タ……タイムスリップうつ！！！？？？」

これは現実なのだろうか？本当に可能なの？タイムスリップ……

「おっと、勘違いすんなよ。通常のタイムスリップとはわけが違うぜ？おまえの記憶へタイムスリップすんだよ。」

そうだな、あんたがある一場面を忘れてしまったとする、そうしたら、そこへは行けない。ノイズがはいるか、画面が乱れる。まあ、鮮明な記憶でなくてもなんとなく記憶があつたらセーフだけど……」

私は、その……よ　妖天魔の話を啞然としながら聞いていた。

「まあ、なんとなくわかった……かな？」

もちろん、無理やり……。

「そうか、だったら、幼稚園のころに戻るか？俺もついていくから。」

「え……？今から？」

「あ、そのまえに、呪文かけてくんねえか？『らむ&クラムエルボンバー』って」

は？

「ら、らむあんどくらむえるぼんばー……！」

パアアアアア

「サンキュ」

「体、大きくなった……！」

「ああ」

大きくなったとは言っても、30センチくらいなんだけどね。ぬいぐるみサイズ

「じゃあ、行くぜ」

こいつはそう言い、あのブラックホールのような物体を出した。ブラックホールというより、夜空と言った方がいいだろうか？星がキラキラと瞬いているのが見える。宇宙をホール状にしたみたいだった。

「え！？ちょ……」

うわああああああっ……！！！！！！

私は、その夜空に吸い込まれていった。

乱暴だ……。こいつ乱暴だ……。――怒

私は思いつき尻もちをついた。空から落とされたんだ。

「もぉ。骨が折れたらどーすんの!!!」

と叫んだが、痛くない。全然痛くなかった。

「いちいち、うるせくなあつ!!!痛くねえくだろ?」

私はこいつ……いや、モルフの言葉にムカツときたが、あえて何も言わなかった。

「ここ、どこ?モ、モルフ……」

私が、そう聞くと、モルフは目をキラキラ輝かせた。

「初めて俺の名前呼んでくれたな れん、よろしく」

「う、うん。……てか、ここどこ?なんか見たことあるような景色だけど……」

なんだか、懐かしい。そんな感じがした。

「ここは、れんの幼稚園のすぐそばだよ。……13年前の」

「え?マジ!?」

「マジ」

そういえば、ここ歩いてみんなと遠足に行ってたっけ……。

怖いほどよく覚えてる。みんな今どうしてる?まだ、色褪せてない?

「もうすぐで、れんとれんの母さんがご到着だぜ?」

「ええええええええ!?!」

「過去の自分に会ってことだ。まだそんな心の準備は……」。

「ホラ、れんちゃん。もうすぐ入園式だよ」

母の声が聞こえた。私は、気付かれるわけがないのにサッと陰に隠れる。

あのころのわたしは、慣れない環境に怖気づき、ぐずっていた。

「いやだ……。いきたくないっ!」

「なに、言ってるの!?!行くよ。」

わたしは、母に連れられて、遊戯室へ向かっていった。

「うわ、れん、ちっせ」

「……」

「ん、どうした……？」

「別に。」

私は複雑な心境だった。過去を見詰めたいという気持ちだが、過去を変えたいという気持ちに変わっていつてしまっているということに気づいたんだ。

タイムスリップって、自分が若返るんじゃないの？ただ、昔の自分を眺めるだけ？

それになんのメリットがある？

「あ、そうだ。レポート書けよ」

「レポート！？」

「ああ。過去の自分を記録しろ。分ったな」

「え？どんなふうに書けば……」

「れん風でいい。ハイ、その質問終了。ほい、これに書け。」

困った。私風^{れん}って……？まあ、いい、とりあえず書こう……！！

私はエルフにもらったノートを見た。そのノートの表紙には、「れんの記憶^{あしあと}」って書いてあった。

私はおもむろに、一ページ目を開く。すると、『ポン』と不思議な形のシャーペンが出てきた。

決心がついた。

書こう。私のありのまま……私の足跡を……。

<記録開始!!!!!!>byれん

~~~~~

「はい みなさん、並んでね。もうすぐ始まるよ」

後ろの方から、保育士の先生の声がした。後ろを振り向くと、わたしと同じ年くらいのコたちが、列になって並んでいた。わたしは、少し不安だったが、そこへ行った。

~~~~~

私は、当時のわたしの視点でレポートを書くことに決めた。私から見たわたしって、思ってるより難しそうだから……。他人を書くよりも難しそうだから……。

~~~~~

~~~~~

どこかで聞いたことのある様なアニメソングが流れ、式が始まった。並びは、背の順で、一番背の低いわたしが一番前だった。

「うわー！ちっさいー！ー！ー！」

「背え、低くいつ！可愛い〜！！！」

入場している途中、保護者や先生のトコロから声が聞こえてきた。小さかった私にもなんとなく、その言葉がわたしに向けられているものだということはわかった。

（そのあとは、保育士の先生が話をしたが、もう12年も前になるので内容は覚えていない（^ー^；））

そこで、シャープペンの動きを止めた。モルフの言ったとおり、ノイズが入ってる。忘れたんだ……。

記憶はいつか、忘れてしまうものなのだろうか？
私はそう思いながら、また、シャープペンをはしらせた。

私は正直不安だった。一日約半分は母と離れて過ごす事になるからだ。だからといって幼稚園に行かないわけにはいかない。
いろんなコと遊べるという期待も少しあって、ちよつと複雑な心境だった。

「おつかれ。今回は終了」

モルフがへんてこな羽根を使って飛んできて私に言った。

「ふう……」

私は、疲労のため息を漏らした。書くのつて結構疲れる……。

「おいおい、もう疲れたのか？先が思いやられるぜ」

「いつまでやればいいの？」

私は一番気になっていたことを聞いた。

「おまえの記憶ぜんぶ」

「ええええっ！！？？」

「うるせーな！！！」冗談だよ！印象に残っているあしあとを全部つてこと！！」

モルフはそう言い終わらない内に、さっきのみたいなブラックホール（？）を作り始めた。

「帰るぞ。」

「……え？もう！？」

まだ、13年前にいたい。わたしを見たい。

「俺、昨日寝てないんだ。俺を殺す気か？」

……ハハハ。

「また、これる？」

「言っただろ？印象に残ってるあしあと全部つて。だから、また行くぜ？」

「……そっか。」

「あ、それと、さっきは乱暴でごめんな。今度はこれにのってタイ

ムスリップしような」

モルフは、小さいカプセルをわり、なにかをだした。

「それは？」

「時空船さ。ふだんはこのカプセルに入れてるんだ」

取り出した小さな乗り物の模型がみるみる大きくなっていく。

数秒後には、立派な乗り物の大きさになった。

「すごいー！！」

「だろ？」

モルフは自慢げな顔で私を見た。

「……てか、なんで今までコレを使わなかったの？（-_-;）いきなり空から落とされて、痛かったよ」

「わーい。修理に出してたんだ」

「だったら、なおってからタイムスリップすればいいでしょー！！」

「うるせーな！！！」

なんだかんだ言いながら、私たちはその時空船に乗り込んだ。

ピピピピ

『認識しました。月影れんさんですね』

一体の……いや、1匹の、といったほうがいいような可愛いロボットが出てきた。

「ねえ、モルフ、このコは？」

「ああ、こいつは、らん。俺の相棒。この船で俺らの世話してくれるやつ」

「へー……。可愛いね。性別は？」

『一人称は『私^{ボク}』ですが、私の性別は女ということになっています』
モルフのかわりにらんが答えた。照れたらしい、頬っぺたのライトをピンク色に点滅させた。声は結構、可愛い。

ただ、『ということになっている』というのには、少しひっかった

た。

「女」だとコンピュータで設定されているだけなのだろう。

『れんさんの現代に帰りますね？』

時空船に備え付けているボタンをカチャカチャいじりながら、
んが聞いてきた。私は、少し困り、モルフを見た。

「ああ」

モルフは私を見て、ため息をつきかわりに答えてくれた。

『了解。ゆつくり帰りますか？高速で帰りますか？』

モルフは、少し考える仕草をしたあと、

「ゆつくりで頼む。れんに教えなきゃいけないこともあるし」
と言った。

『了解』

早く帰りたいんだけど……。

ウィイイイイン

「お、動き出した」

私の思いはつゆ知らず、窓の外の宇宙(?)を眺める呑気なモル
フ……。

「私、早く帰りたいの」

私は半ば怒りながらモルフに言う。

「大丈夫だって。同じ時間、同じ場所に戻るから」

「え……。そーなんだー」

「ああ」

「ねえ、さっき言ってた、ウチに教えたい事って？」

「ああ」

そう言い、モルフは私の持っていたノートをさっと私から取り、

「フムフム」とそれを読み始めた。

私は何も言わずに、そのようすをじっと見ていた。

モルフは、それを読み終えたらしく、パタリと閉じた。

「ふん。自分の視点からね。結構、いいじゃん」

モルフは、小生意気な笑みをこぼし、感想を述べた。

私は、そんなモルフを見て、気になっていた質問を試してみた。

「ねえ、このノートの記入欄、全部手書きみたい。もしかして、モルフ……これを書いてたから昨日寝なかったの？」

私がそういつた途端、モルフは顔色を変えた。

「べ、別に……大した事じゃねえよ／＼／＼」

モルフは顔を赤く染めた。おもしろい奴……。

てか、ツンデレ……ツンデレ男バージョン？（笑）

「そーなんだあ。ごくろうさん」

私はそれだけで勘弁してやった。私は話題をかえることにした。

「ねえ、モルフ。昔の自分をただ見ているだけなの？」

私がそう聞いたのは、このままじゃ、なんのメリットもない。そう感じたから。

頭の中でタイムスリップしてたときは、自分が若返っていたから。違和感を感じたのかもしれない。

「……んだよ、いきなり……」

「ただ見物^みているなんていや。私は過去と戦いたい……!」

いつの間にか、過去を振り返って、現実^{イマ}を掴むという夢は、過去と戦い、未来^{イマ}を生きるという夢に変わっていた。

「……できるよ。」

「本当……!?」

「ああ。でも今日は止めといた。幼稚園児になるなんて、結構抵抗

あるだろ？」

「……うつん。大丈夫。」

過去と戦いたいから。そんなのなんでもない。

「そうか。じゃあ、今度から俺がレポート書いてやる」

「本当！？ありがとう。」

レポート書いてくれることに感謝したんじゃない。過去と真剣に向き合わせてくれることに心から感謝したんだ。

「ねえ、らん」

私は、らんを呼んだ。

『はい、なんでしょう』

「高速お願いします」

『了解』

@@@@ @@@@ @@@@ @@@@ @@@@ @@@@

『れんさん。おつかれさまでした。つきましたよ』

5分もしないうちに私の現在セカイの自分の家についたようだ。

……って、ん？

「あれ？ここどこ？まだ宇宙じゃん」

ここから地球に帰れ。……みたいな？

『その扉から出れば、れんさんの部屋の押入れに行きます』

らんの言つとおり、そこには扉があった。

押入れて……ドラ もんみたいじゃん。あ、ドラ もんは、引き出しか……。

あ、思い出した。押入れはドラ もんの寝室ですね！！（もうやめろ）

「いくぞ」

モルフはそう言い、2つのカプセルをとりだし、時空船、らんをそのカプセルにそれぞれ入れた。

「モルフも!?」

私は驚き、モルフを見た。

そしたら、モルフは、ジト目で私を見て、

「あつたりめーだろ？オメーの妖天魔なんだから」と呆れたように愚痴った。

そう。。

「あー、おもしろかったー！！！！」

私は、押入れから出て、そう叫んだ。

だって、なかなか興奮がおさまらないんだもんっ！！

「おい、楽しむための時間旅行タイムトリップじゃないだろ？過去を見詰めるためなんだろ？」

「そうだよね……」

私は目を瞑り、静かに呟いた。

そうだ、私は決めたんだった。

過去と戦う事を。そして未来を掴む事を……。

「ありがと。モルフ、らん」

私は大切な事を彼らに教わった。ありがと。

「これから頑張ろうぜ？」

モルフは不器用な笑顔で私に言う。笑うことにまだ慣れていないだろう……いや、自分の気持ちを表すことに不器用なんだ。

私はそんなモルフが可笑しくて、思わず笑ってしまった。

「なにが、おかしいんだよ!?」

モルフは不貞腐れた顔で言い返してきた。……多分、照れ隠し。

こいつうゝ、結構生意気だなあゝ。これからトコトンいじってやるう！！！（おいおい；）

「別にいゝ」

私は、わざとらしいジト目でモルフを見た。

「……ったく。じゃあ、今日から俺の家はおまえの部屋な。」
「はあっ！？」

私の部屋あつ！？

「困るんだけど。机の上もぐっちゃぐちゃだし」

私は、いろいろな文具で散らかった机の上をチラツと見た。

「うっわあゝ。おまえ、漫画家か！？（笑）コピック転がってるわ、漫画の原稿用紙が裸のまま教科書の下敷きになっているわ、トーンも放っぼってあるわ……。最低だな……。――；）」

モルフはそういい、机の上にあったコピックを蹴った。

「関係ないでしょ！？もおっ！コピックでサッカーしないでよ」

「へいへい。あ……。もう時間だ！！！！」

モルフがそう言い終わると、モルフの体は出合ったときほどのサイズになった。

少し驚いたけど、私はモルフをつまんで、机から下ろした。

「ったく、どこに住むの？そんな体で……」

そう聞いたのは、潰してしまう恐れがあるから……。――（^―^；）

「なんだよ。そうジト目になるなって！」

「自分がジト目になってるなんてわかんないもゝん」

「ははは（怒）。じゃあ、いすの中に住む。」

モルフはいきなりそう宣言しやがった……。

「はあ？いす？」

私は発言の意味が分らず戸惑った。

「ああ。なんか座るところが開くいすあるだろ？そこでいい」

「……。わかった……。その中、掃除する。でも、なんで知ってるの？」

「1回、下見に来てたんだ」

あつそ……。

私はダラダラと掃除を始めた。

「ごくらゝさん」

手伝え……！私はそう思いつつ作業を続ける。漫画を描いた紙や、何年も前の学年誌の付録のシール……わんさか出てくる。

「……ん？」

手が止まった。何かを掴んだからだ。全身に寒気が走る。

なぐんか、嫌な予感がする……。

私は恐る恐る……手を開いた。
プルプルと蠢く怪しげな物体。

……う、蛆虫……（、川）

うじむし？ Uzimushi？ ウジムシ！？
蛆虫iiiiiiiiiiiっ！？！？

「いやああああああつ……！！？？？」

「なんだ？ どうした？」

モルフが驚いた表情で飛んできた。

「う、うじiiiiiiiっ！！！！！！」

私は動転し、モルフに向かって蛆虫ちゃん（笑）を投げてしまった。

「ん？なんだ、こいつ可愛いじゃん？ よしよし。怖いねえちゃんに投げられて怖かったよなあ。よしよし」

うつわ！……こいつ頭おかしい！？

そう思いながらも蛆虫はモルフに任せておいて、下におりて手を洗い、また2階の自分の部屋へいき掃除を続けた。

「はあ……掃除つて結構疲れるな……」

「主婦になったらちゃんとするんだぞ。さぼるなよ」

そう言うモルフは蛆虫とまだじゃれている。見たら気分が悪くなりそうだ。

「へいへい。……ん？」

私は手を止めた。いすの中の奥のほうに小豆の様なものがある。

「……？なんだろうこれ？小豆なんて食べた覚えないけど……」

私は首をかしげ、それを掴もうとした。

ガサ

「……………」（サァー） 血の気がひく音

動いた。小豆が動いた！……！。。（ ）

ブルブル（（（、（（（）））））

小豆に、足が……生えた。生えてしまった……っ……！！！！

小豆は不気味な動きをしている。

私は悟った。そいつの正体を……。

ゴキブリやんけ！！！！

私はとつさの出来事に悲鳴をあげることすら忘れていた。ただただ、冷や汗が流れるばかりだ。

こいつは気持ち悪い。世界で一番気持ち悪い。……いや、恐怖を感じている？

人はなぜこんなにも小さくて潰せば殺せる弱い虫に恐怖するのだから

う？放っておけば別に問題ないはずだ。ゴキブリはいきなり人間に襲い掛かってきて生命の危機へ追い込むような凶悪な虫ではない。

……ねいつたい何故？……って、のんきにゴキについて語ってる場合じゃない！！

私はモルフだったらなんとかしてくれるかな？

と思い、未だに蛆虫のやろう（おい）とじゃれているモルフに声をかけた。

「ねえ、モルフ。このゴキブリ殺して！！！！めっちゃきもちのっ！！！！」

私がそう言うや否や、モルフはすごいスピードで飛んできた。

「まだ殺してねーだろうな？」

「うん……」

「ゴキちゃん、いつしょに遊ぼうな」

「は……？」

モルフの言葉に絶句してしまった。

ありえない。人間が恐れてる生き物と遊ぶなんて……。ありえへん！！！！！！！！

こんなおかしなやつとこれから一緒に生活していくなんてぜったいに嫌あああつ！！！！！！

「れん、いつしょに遊ぼうぜ？」

「もうイヤあああつ！！！！！！！！」

第二話：記憶へモドル。（後書き）

どーも、月影です。

うわ……タイムスリップしてしまいました……汗。

しかも、妖天魔って……。

この中にもノンフィクションも含まれてますんで（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3241c/>

わたしのあしあと

2010年10月9日19時20分発行